

クラカウアーの『カリガリからヒトラーへ』(1)

荻野 雄

Über Siegfried Kracauers *From Caligari to Hitler* (1)

Takeshi OGINO

Accepted June 6, 2007

抄録：本論文は、主としてジークフリート・クラカウアーの『カリガリからヒトラーへ』を考察する。『カリガリからヒトラーへ』はクラカウアーのおそらく最も有名な著作であるが、これまでほとんど詳しく研究されたことがなかった。ここではこの作品を解読するために、クラカウアーがそこで前提としているワイマール共和国史把握と、「パリの街路の思い出」、「思い出なき街路」、「街路の悲鳴」などの論考に見られるワイマール時代の彼の街路研究を見ていく。クラカウアーにとって「室内」と対比的関係にある街路は、近代を超えた世界の象徴であった。

索引語：クラカウアー、『カリガリからヒトラーへ』、ドイツ映画、ナチス

Zusammenfassung : Diese Abhandlung folgt der vorausgehenden Betrachtung über den Gedanken Siegfried Kracauers und behandelt hauptsächlich Kracauers *From Caligari to Hitler*. Obwohl *From Caligari to Hitler* vielleicht eines seiner berühmtesten Bücher ist, ist es bisher nicht eingehend untersucht worden. Um *From Caligari to Hitler* präzise zu analysieren, untersucht diese Abhandlung seine Auffassung über die Geschichte der Weimarer Republik, die Kracauer in diesem Werk vorausgesetzt hat, und seine Forschung über die Straße. In seinen Essays in der Weimarer Zeit, z.B. "Erinnerung an eine Pariser Straße", "Straße ohne Erinnerung" und "Schreie auf der Straße" hat er über dieses Thema diskutiert. Für ihn war die Straße, die im Gegensatz zum Interieur steht, das Symbol der Welt, die das Moderne überwindet.

Schlüsselwörter : Siegfried Kracauer, *From Caligari to Hitler*, deutscher Film, Nazi

I 亡命時代へ

1929年に巨大コンツェルンのI・G・ファルベンが資本参加して以降、フランクフルト新聞の政治姿勢は目に見えて「現状追認的」となり、「批判的著述家」であるクラカウアーは同新聞にとって不快な存在となっていった。

入社以来フランクフルト本社に勤務していたクラカウアーは、1930年4月にベルリン支局への異動

を命じられる。この配置換え自体は必ずしも「左遷」ではなく、何より以前からベルリンに強い関心を抱いていたため彼自身もこの決定を歓迎したのであるが、ベルリンへの移住と共に彼に対する社のプレッシャーは急速に厳しくなった。クラカウアーは支局編集長のキルヒャーと深刻に対立し「慢性的な超過労働」を強いられたばかりか、自分の文章が掲載されるために「多くのことを書かずにすまず」という自己検閲も行わざるをえなかった。しかしこれらのこと以上にクラカウアーを苦しめたのが、給与の削減である。1931年1月に月給が100マルクも減額され、それだけでもクラカウアー一家(彼は1929年3月に結婚していた)の経済状況を逼迫させるのに十分であったのに、同年末にはそれはさらに半額とされてクラカウアー夫妻は財政的に完全に追い込まれてしまう。にもかかわらずなお、その後も再三再四賃金は削られていった。確かに同時期、経営の悪化により他の社員も給与を減額されてはいた。だがクラカウアーほど大幅な削減を蒙った者はおらず、彼を辞職へと追い込もうとする意図が経営者側にあったことは明らかであった。

こうした仕打ちを受けても、クラカウアーは新聞社を離れなかった。他に適当な糊口の術を見出せなかったからばかりではなく、フランクフルト新聞文芸欄の執筆者として築き上げた令名高き知識人の地位を、彼は捨て切れなかったのであろう。クラカウアーのこの躊躇いを嘲笑うように、1933年1月のヒトラーの政権奪取は彼から殆ど全てのものを奪った。ドイツの情勢に危機を感じたクラカウアーは、フランクフルト新聞社にパリ特派員への任命を希望したうえで、帝国議会が焼失した翌日フランスへと亡命する。けれどもユダヤ人との結びつきを嫌った新聞社はこの要望に応えることなく、既定の賃金も全額支払わないまま、1933年8月彼に一方的な解雇通知を送りつけたのだった。「彼らはユダヤ人や左翼と手を切りたかったのです。それ以外の理由なんかありません。こんな結末のために私は11年間も働き、身を危険に晒し、生涯の半分を浪費したのです。」(C76) 名声も職も祖国も失って異国に投げ出されたクラカウアーのパリでの生活は、「とても生きていくと呼ぶに値しない」ものであった。著述家として本格的な働きを期待される40代の大部分を、彼はただ生き延びるためだけに費やしたのである。¹⁾

それでもこのパリ時代の1937年に、クラカウアーは苦心作『ジャック・オッフエンバックと彼の時代のパリ』を発表している。この作品は一部からは高く評価され、すぐに仏語・英語に翻訳されて出版されたものの、古い友人たちからは残酷なほどの徹底的な批判を受けたうえに、彼が期待したような経済的成功をもたらすこともなかった。ようやく1941年、「これまでの生涯で最も貧しい状態」に陥ったときに、クラカウアーはナチに占領されたフランスからアメリカへの脱出に成功する。「遂に最終段階です。これが最後のチャンスです。しくじれば全てが終わりです。」(C100) アメリカ到着後、彼は何とか奨学金を取得し、52歳にして初めての外国語(英語)での著作に集中的に取り組む。その成果が、『カリガリからヒトラーへ』であった。パリへの亡命から14年後の1947年に出版されたこの著作によって、クラカウアーは以前よりも不安定な地位においてながらも言論の世界へと復帰するのである。

さてこの『カリガリからヒトラーへ』は、クラカウアーのおそらくは最も有名な作品であるにもかかわらず、その内容が彼の思想全体を視野に入れて詳しく検討されたことはなく、近年のクラカウアー・ルネッサンスと呼びうる状況においてもこの本への関心は極めて乏しいままである。そこで本論文では、クラカウアー思想の展開を追跡する企ての一環として、『カリガリからヒトラーへ』の構造およびその含意の彼の意図に即した正確な把握を試みてみたい。そのためには、作品の背景となっている共和国史理解と、重要なキーワードの一つである Straße(街路, ストリート)がワイマール時代の

テキストでも占めていた枢要な地位について、あらかじめ見ておかねばならないであろう。

Ⅱ 『カリガリからヒトラーへ』を読むために① ワイマール共和国の歴史

『カリガリからヒトラーへ(以下『カリガリ』と略記する)』は、副題「ドイツ映画の心理学的歴史」が示す通りワイマール共和国下のドイツ人の「集団精神」を研究対象としている。共和国の無残な瓦解を理解するには、戦間期のドイツ人の特殊な心理的傾向に目を向ける必要があると「序文」でクラカウアーは強調する。とはいえ彼は決して、ナチスの勝利を精神的素因のみに帰しているのではない。ワイマール・ドイツでは、心理的傾向が政治体制や経済状況などの外的要因と噛み合いながら作用して、民主主義を掘り崩したのであった。また『カリガリ』ではドイツ人の精神は、ワイマール時代を通じて大雑把に一括して取り扱われるのではなく三つの時期に分けられて、そのそれぞれの時期が一つの連続した精神の物語の違った局面として描かれているが、この区分が主に顧慮しているのは共和国の政治的・経済的状况の変化である。このように、クラカウアーの心理学的考察はワイマール共和国の外的な情勢の変動と密接に絡められている。しかし言うまでもなくそれを捉える仕方は一つではないから、『カリガリ』を正確に読むためには、クラカウアーが精神の次元にまで入り込んで補完的に解明しようとしたのは、そもそもどのように把握された「共和国の歴史」なのかを理解しておく必要がある。

彼が抱いていたワイマール像を推定する手掛かりは、この頃に書かれた文章以外では、『カリガリ』で依拠されている参考文献、特にアルトゥール・ローゼンベルクの *Geschichte der Weimarer Republik* である。各部の初めなど『カリガリ』の随所に顔を覗かす共和国史の簡潔な記述は、基本的にワイマール研究の嚆矢となったこの古典的著作の観方に沿っているのである。そこで以下でこの作品と、パリ亡命後発表したナチを巡る論説を含めたクラカウアー自身のテキストとに基いて、クラカウアーが戦間期のドイツ精神の変遷を構成する際に前提としているワイマール史観の要点を簡単に押さえておく。²⁾

1 戦間期ドイツ民主主義の本質的脆弱さ

ドイツの降伏による戦争の終結が目前に迫っていた1918年11月初め、「屈辱の講和」より「荣誉ある没落」を望んだ海軍将校が下した出撃命令をきっかけとして、水兵たちが蜂起した。彼らは兵士評議会を結成してキール市を占領し、講和締結と軍の民主化を要求した。この事件は、伝統的な権威が失墜した厭戦気分が満ちていたドイツ社会を強く揺り動かした。瞬く間に各地で兵士と労働者が反乱を起こして権力を奪い、殆ど市民の抵抗を受けることなく労・兵評議会による支配が打ち立てられた。11月9日にはベルリンにもこの動きが波及して、同日慌しく共和国が宣言され、帝政は終焉した。

「11月9日の運動は、民主主義的、共和主義的、平和主義的性格を持つてはいたが、所有関係の転覆を目指す積極的に社会主義的な思想は、さしあたりそこには現れていなかった。」(B9)しかし兵士たちは上官に対する反逆を正当化するためには、社会主義と社会民主党に頼る他はなかった。それらは、当時のイデオロギーおよび政党の中で、唯一既成の権威に対立していたからである。こうして権力を握った社会民主党は、独立社会民主党と共に「人民代表委員政府」を組織し、新生ドイツの創出に着

手した。

この時点で、帝政時代の支配集団は絶望的な状態に追い込まれていた。「11月革命で打ち倒されたのは、古きプロイセンの封建体制の担い手たち、つまり将校、大土地所有者、高級官僚であった。彼らは当時全く無力であると感じていた。」(B7) 将校も官僚も、政府と評議会が認める限りで職に留まりえたに過ぎなかった。エルベ川以東のプロイセン貴族は所有地没収に抵抗する手段を何も持ってはおらず、かつては保守党を支持していた農民たちも、戦争で犠牲を強いられたため旧体制に背を向けていた。封建階級と共に戦争までドイツを支配してきた大工業家層は所有財産喪失の恐怖に怯え、労働者にはいかなる妥協をしてでも資産を死守しようとした。他方で中間層、つまり「知的職業従事者、サラリーマン、官吏、手工業者」などは、古き体制の崩壊を歓迎しながら、「社会民主党の独裁が労働者の階級テロ、ブルジョアジー層の抑圧、経済の領域での大胆な実験」(B10)に到ることを恐れていた。

しかし社会民主党は、民主主義体制をドイツに定着させることを当面の目標とし、社会の根底的な変革には着手しようとしなかった。1918年11月より1919年1月まで人民代表委員会議が独裁的な権力を行使したが、それは8時間労働、失業者扶助、男女の普通選挙権などの実施を決定したに留まった。戦前もっぱら体制内での労働者の地位改善に取り組んできた社会民主党は、国家改造に対しては具体的なヴィジョンを磨き上げていなかったため準備不足であり、また余りに急進的な改革が完全な混乱や強権的支配を帰結させてしまうことにも不安を抱いたのである。1934年のローゼンベルクは、社会民主党のこの姿勢が共和国にとって致命的であったと厳しく糾弾する。ロシアのように民衆の蜂起を共産主義革命にまで押し進めなかったから、ではない。ともかくまずドイツに確固とした民主主義を根付かせるという方針は正しいが、そのためには社会政策や選挙権の拡大だけでは十分ではなく、帝政を支えた旧権力の駆逐が絶対に不可欠だったのである。

社会民主党の躊躇いにより、人民代表委員会議は私的所有関係への介入を避けた。しかし「その頃少なくとも二つの領域で、そうした介入がドイツの民主主義の利益のために必要であっただろう。即ち、大土地所有と鉱山である。」(B34) 時代遅れの大地所有は当時東ヨーロッパの殆どの国でも廃止されており、その没収と分配は社会主義とは何の関係もない改革であったのに、農地改革は実行されず封建貴族の権力は粉碎されなかった。この失策は農民階級を失望させ、彼らを共和国から遠ざけてしまった。また、最も「社会化」に適していたルール地方の炭鉱ですら経済状況を配慮してそれが見送られた結果、革命直後は共和国を是認した大産業家層も、一つの独立した勢力として潜在的に行動の自由を維持し続けた。

帝政期の他の支配集団に関しても事情は変わらなかった。人民代表委員会議は共和国に忠実な新たな軍を作ろうとしなかったため、ヴェルサイユ条約によって10万だけ許されたワイマールの職業的軍隊は、帝政期の軍の伝統を信奉する将校たちが自らの精神を注入しながら作り上げていった。ドイツ国防軍は「脱政治化」し政党の日常的活動には介入しなかったが、民主主義に対して冷ややかで社会主義には敵対的な、共和国政府から独立して行動する「国家内国家」となった。行政・司法機構も、外交官を含む高級官僚層および司法官の殆どが戦前の地位に留まったので、多少共和主義的な「政治的」官僚が入り込みはしたものの、まもなくほぼ帝政期の姿で甦った。

つまり共和国は、ドイツ社会の伝統的支配層が「革命」をくぐりぬけて、経済・軍・行政・司法といった国家の枢要な権力を掌握し続けるのを許してしまった。言い換えればワイマールドイツは、帝政志向のない共和政に距離を置く強い勢力を初めから内部に抱えていたのである。こうした構造的な脆弱さという観点から、ローゼンベルクは共和国の早期の崩壊は半ば宿命付けられていたことを示

唆する。クラカウアーはこのローゼンベルクの認識の説得力を認め(彼は「こうしたことはよく知られている It is well known that」という表現を使っている),それを『カリガリ』の議論の基礎に据えた。ただし彼はそのうえで、政治的・社会的体制のこうした歪みやまた多くの人を追いつめた経済的困窮からだけでは、ドイツ人がヒトラーのような人間の許に走ったことは十分に理解できない、と主張する。ローゼンベルク流の史観は、共和国を規定していた特殊な心理傾向の探求によって補強されねばならないのである。それではクラカウアーは、ワイマールの歴史のいかなる側面が特に心理学的考察を求めていると考えるのか。

2 ワイマール共和国の「理解しがたい」側面

社会民主党の急進的改革への抵抗は、統一的な行動が必要であった左翼陣営内の深刻な分裂も帰結させた。ドイツで自然発生した兵・労評議会は、その頃のロシアの見せ掛けだけのソヴィエトとは違って「語の本来の意味での評議会」であり、官僚の支配に慣れたドイツ人が自治を学ぶためにも、また民主主義の社会的条件を作り出すためにも重要な機関であった。だが社会民主党は評議会を、本来それとは関係がない「ボルシェビキの独裁」と同一視し、国民議会がドイツに誕生したら出来る限り速やかに消え去らねばならない過度的な機関であると位置づけた。社会民主党の評議会に対する不信は、それに期待する独立社会民主党との間に亀裂を作り出した。変革を支持する多くの労働者が独立社会民主党へと流れ、同党内の最左派であるスパルタクス団は1918年末にドイツ共産党を結成し、共産党はやがて社会民主党と並ぶワイマールの左翼勢力となるが、両党が右翼の台頭を抑えるために密接に協力することは最後までなかった。

1919年1月の急進的労働者の反乱を人民代表委員が義勇軍に鎮圧させたことが転機となって、基本的に力を挫かれなかった伝統的支配層は共和国転覆へと蠕動し始めた。この頃より1923年までのドイツは、左右勢力間の激しい闘争に揺さぶられた。1920年3月には、帝政復活を目論む政治家カップと国防軍のリュトヴィッツによる一揆 Putsch が起きた。この一揆は早期に失敗し、改革推進を求める陣営にとっては逆に、革命の成果が失われることを危惧する人々を動員して右派を圧倒するチャンスとなった。だが左翼の指導者層は、このとき積極的に動かなかった。また1923年に絶望的なまでにインフレーションが亢進し、多くの国民が窮乏化の恐怖に晒され革命に期待した好機も、彼らは利用しなかった。おおよそ1921年の夏以降、社会民主党も共産党も行動不能に陥っていた。「社会民主党では深刻なペシミズムが支配しており」、ロシア共産党に盲従していた共産党は、「ロシアの国家政策的策動により麻痺させられていた」(B123)。

他方で1919年に民主的なワイマール憲法が公布され、変則的ながら議院内閣制が導入されたことはドイツの民主主義にとって大きな成果であった。国会多数派の圧力によって実質的な民主化を進めることは、あるいは可能かもしれなかった。このこと、それからワイマールドイツの権力分布状況一般を考えると、大勢力となりつつあった新旧中間層の動向こそが共和国の運命を握っていたであろう。

その中間層は、戦後は絶望的な経済状態のため零落していた。そして1923年にインフレーションが加速すると、農家や銀行や産業界が利益を得た反面で、中間層の生活は決定的に破綻してしまった。しかしこうした「プロレタリア化」は、救いとなりえたであろうさらなる社会改革へと彼らを駆り立てはしなかった。1920年の選挙でブルジョア右派の国家国民党と国民党が大幅に議席を増やし、左派の

民主党が惨敗したことが示しているように、むしろ中間層は反共和国陣営に接近していった。彼らは、国家国民党などに体现される伝統的な支配層を支持したばかりではなかった。戦後のドイツに叢生し、自ら成り上がることを望み古き権威の再興などは全く考えておらず、にもかかわらず共和国を徹底的に敵視するその姿勢ゆえに大土地所有者や大工業家から支援を受けて成長した民族主義者にも、中間層は引き付けられていったのである。

このように、共和国の困難な歩みの過程にも、その本質的な欠陥を克服する機会は確かに存在していた。そうであるのに伝統的支配層に抑圧されてきた階層の人々は、それを掴み取ることを怠ったばかりか、自身の利益に反するかもしれないにもかかわらず共和国への反逆にすら踏み切ったのだった。「ドイツ国内の情勢には説明しえない何か、通常の視界の中で捉えられる状況からは導き出しえない何かがあった。」(A10) 正にこのドイツ人の理解しがたい退嬰の根源を、クラカウアーは集団心理の病理に求めていくのである。「社会民主党の体質的な弱さ、共産党の不適切な行動、ドイツの大衆の奇妙な反応」(A10) といい、ローゼンベルクを初めとする歴史家が止目していても十分には説明を与えていない事実は、その背後の「心理的メカニズム」にまで遡らなければ了解できない。「経済の変動、社会的窮状、政治的謀略といった目に見える歴史の裏で、ドイツの人々の内的傾向に関わる秘密の歴史が展開している。」(A11) クラカウアーは既に 1930 年の『サラリーマン』で、この「秘密の歴史」を幾分か明らかにしていた。『カリガリ』の目的は、中間層の内面を主たる舞台として展開されるその歴史を最初から「終わり」まで辿ることにある。それゆえ『カリガリ』は共和国末期に出版された『サラリーマン』の延長線上にある作品と言えるのだが、しかし後者がなお「警世の書」でありえたのに対し、破局が起こった後の地点から振り返る前者は、1947 年 5 月のパノフスキー宛手紙における彼自身の表現を用いるならば、「屍体解剖」(D47) の報告書となったのだった。

3 安定期から破局へ

周知のようにワイマール共和国は、1920 年代半ばに「成立直後」の混沌とした状態を脱して短い「安定期」を享受した後、30 年代には再び秩序を失って迷走し、やがてヒトラーによって完全に破壊される。後に考察するとおりクラカウアーは、これらの時期のそれぞれにドイツ精神の退廃が違った仕方でも表出していると見た。引き続き、共和国の歴史を最後まで追っていこう。

1924 年にドーズ案がまとめられ、賠償問題に解決の道筋がつけられると、信用を回復したドイツはアメリカにとって魅力的な投資先となった。ドルの流入によって、「産業的可能性」は持っていたドイツ経済は急速に立ち直った。産業界の社会的影響力も着実に復活していった。経済の回復を機にドイツでは国際競争力強化のための企業の合併が相次ぎ、1925 年には化学工業の有力企業が、後にフランクフルト新聞に資本参加する I・G・ファルベンを創立した。またこの頃より、クラカウアーが『サラリーマン』で新中間層の没落の第一原因に挙げている、アメリカ式の科学的管理などの企業内の合理化も開始された。クラカウアーの言葉を用いるなら、ラティオが一定の範囲内においてかなり根底的に社会を再編成していったのである。

こうした経済的安定は、ドイツの諸階層を共和国と和解させたように見えた。1924 年 12 月の選挙では、左右の共和国反対勢力である民族主義者と共産党が敗れ、対照的にドーズ案を受け入れた全ての政党が勝った。国家国民党ですら共和国を消極的にはあれは認し、28 年まで断続的に内閣にも参加

した。「1924年から28年までドイツの中間階級は一般に、ブルジョア政党に所属していたサラリーマンや官吏と同様共和国を承認していた。この国家形式の下でドイツが平穏であり、まずまず生活していけるならば、ワイマール共和国に反対する理由はなかった。」(B171)しかし「だからといって、ドイツの中間層は資本家と同様に、民主主義と共和国の信念に基く支持者となつたのではない。」(B171)1929年のヤング案に対するフーゲンベルク＝ヒトラーの反対運動が大衆を動かさなかったという事実は、連合軍の1930年のラインラント撤退も何の感動も引き起こさなかったという事実と照らし合わせて考えると、「ドイツ国民の大多数が国家的問題に殆ど無関心になっていたこと」(B194)を示しているに過ぎない。「中間層と資本家は、深刻な危機に見舞われればいつでも民主共和国に背を向ける用意ができていた。」(B171)そして、ドイツ経済の繁栄はアメリカが資本を引き上げれば容易く崩壊してしまう脆さを内包していたから、「深刻な危機」は安定期にも常に身近に潜在していたのだった。「ドイツ経済にとっての実際の危険は、……ドイツがおそらく250億金マルクも外国から借り入れており、しかもその一部はいつ引き上げられるかもしれない短期負債であったこと、1924年に獲得した地位を維持するためには絶えず新たな外貨を必要としたこと、これらの点にあった。」(B164)

とはいえ1928年には、1923年以降政権から遠ざかっていた社会民主党が5月の選挙で過去最高の900万票を獲得し、久しぶりに政府に復帰して共和政の擁護と労働者階級の生活改善に努めた。「国防軍と大資本の堅固な城砦は揺るがなかった」が、民族主義勢力は衰えて秩序の前に溶け去ったかのようであり、ロカルノ条約がドイツをヨーロッパ国際社会に復帰させたこともあって、共和国の礎は固められたかに思われた。だがその矢先の1929年、シュトレゼマンが死に、ニューヨーク市場で株価が大暴落したのだった。

「1929年に経済恐慌が素早くかつ圧倒的な力でドイツ国民に襲い掛かったとき、それは国民大衆から保障された生活への希望を残らず奪い去った。」(B197)失業者やホームレスが激増し、誰もが没落の予感に怯えた。安定の幻想は吹き飛んだ。「1924年以降は、戦争とインフレーションの経験の後やっと平穏への道が見出されたと思われていただけに、人々は激しく反撥した。労働者と中間層の憤慨は異常なほど強かった。……国民大衆の怒りは、革命的な爆発へと向かった。」(B197)議会制も資本主義も官僚もワイマール共和国を構成する一切は、「体制 System」という憎悪に満ちた表現で一括され攻撃的となった。左右の急進勢力が再び台頭し、まずはシュレスビヒ・ホルシュタインの農民たちが暴動を起こした。やがて急進化した国民の多くがナチスに殺到した。無気力なうえ「体制」の一部と見なされた社会民主党も、「スターリン的官僚」に率いられた共産党も、これに対抗して国民を動員することができず、両党は統一戦線を組むこともなく事態の推移を傍観した。

1930年、社会民主党も参加していた大連立のミュラー内閣が倒れると、経済界と大統領もその一員である大土地所有者層は議会制を見限り、独裁的な指導者によって危機に陥った産業と農業を救済させることを決めた。だがこのときは未だナチスの暴力性と過激さに対する警戒論が強く、国防軍の意向もあって保守的政治家のブリューニングが首相に任命された。ブリューニングは当初より議会に政権基盤を作る努力を放棄しており、ワイマール憲法48条の大統領緊急令を用いて、大統領が強く求めた農業救済策を含む財政・経済政策を実施した。議院内閣制である以上国会はこの脱議会主義的な大統領内閣を倒すことができたのだが、第一党の社会民主党は1930年9月の選挙でナチスが躍進して以後為す術を失って、「より少ない悪」としてそれを容認する姿勢を示したのだった。実質的に「共和国」は、このときに終焉した。「これ以降ドイツでは、ある独裁政府が別のそれに取って代わったに過ぎない。」(B211)ブリューニングはデフレ政策で経済的危機をいっそう深め、人々の保守派への信頼

を失墜させた後で罷免された。続く時代錯誤にも貴族だらけの内閣を組織したパーペンも、労働者を取り込んで軍部独裁を樹立しようとしたシュライヒャーも、全く支持を集められず何も為しえぬまますぐに辞任した。対するナチスは1932年7月の選挙で社会民主党を抜いて第一党となっており、急進的な綱領を掲げる裏で伝統的支配層に十分自分たちの「無害さ」を納得させていた。ドイツがヒトラーに委ねられるときがきた。

4 ドイツ諸階層とナチス

1933年1月のヒトラーの政権奪取は、冒頭で述べたようにドイツにとってと同様にクラカウアーにとっても一つの輝かしい時代の終焉を意味した。その年から1941年まで、彼は妻と共にフランスでの苦しい生活を強いられる。この間彼は表立った政治的発言や行動からは手を引き、亡命仲間からも孤立していたが、実は友人たちにも知らせないまま、ドイツの現状に関する批判的評論を数本匿名でフランスの雑誌 *l'Europe nouvelle* に寄せていた。それらの作品では、『サラリーマン』以来のドイツの病状診断の延長上に、ヒトラーの支配を可能にしたドイツの政治的・精神的条件が考察されている。特に注目すべきなのは、1933年3月の選挙結果を受けて書かれた「ドイツ諸階層とナチス」である。この論稿でのナチズム勝利の原因の分析は、ドイツ社会の歴史的に制約された歪みを指摘しながら中間層とヒトラー運動とを密接に関係付けており、『カリガリ』へと繋がる問題意識の萌芽をそこに確認することができるのである。

組織的な不正が行われたとはいえナチスが1700万票も獲得しえたという事実は、幅広い層にそれが受け入れられたことを示している、とクラカウアーは言う。農民、大ブルジョアジー層、労働者層、中間層などのドイツの様々な社会集団は、それぞれどのような理由からナチスに投票したのか。ドイツの職業人口の1割程度を占める農民層は、全農地の5分の1を所有する18,700人の大土地所有者、残りの5分の4を分け合う500万人の小農、そして農業労働者から構成されている。これら農民各層は、20年代後半にはおしなべて国際競争の激化や租税の増加のせいで追い詰められており、シュレスビヒ・ホルシュタインにおけるような反乱に走る一方で、「緑色戦線」を形成し政府に対して圧力を加え始めてもいた。だが緑色戦線を指導したのは、小農の多くが生活に窮し政治的に相互に結合した経験も持たなかったこともあって、伝統的な威信をまとった14,500人の東エルベの大土地所有者であった。共和国の農業救済計画は、このエルベ以東の特権カーストの権力を打ち破らなかったために失敗した。大土地所有層は自分たちの権益を維持するため保護関税や補助金を要求し、農業労働者の地位改善を妨げ、失業対策となりえた植民計画にも抵抗した。途方もない額の税金が、小農の扶助のためではなく「東部救済」のために、「穴の空いた樽」に注ぐように支出され続けた。もちろんこれほどの恩恵を受けても、大土地所有者は共和国の敵であり続けた。「体制」に対する彼らの憎悪に応えたのが、「11月の犯罪者」をどこよりも仮借なく告発するナチスであった。ナチスは、資本主義を攻撃し小農や農場労働者の利益に沿う公約を掲げながら、1928年以降は当初の綱領の一つであった「公益を目的とした土地の無償収用」を事実上放棄していたのである。

ナチスの躍進は、産業界つまり大ブルジョアジーの財政的援助に依るところが大きい。石炭・鉄鋼業界の大物キルドルフやテュッセンなどが支援しなければ、運動の飛躍的な拡大はありえなかつたろう。これらの産業界の指導者たちがヒトラーを支持したのは、やはり共和国に対する敵意からだっ

た。共和国で強いられた労働者の高額な賃金が負担であったばかりか、経済活動を阻害する不安定な議会政治や共産主義勢力の台頭も彼らは嫌悪していた。私的経済に理解を示し、労働者政党から私有財産を守ることのできる、議会から超然とした強力な権威が彼らの希望であった。それに応えるべくヒトラーは、1926年にルール地方を回り、自由経済を最も目的合理的な制度として保護することを約束していた。

確かにリベラルな大ブルジョアジーはファシズムに抵抗していた。しかし結局は彼らも共産主義に対する不安から、「彼らの真の敵である」ヒトラーが権力を掴むのを助けた。「ブルジョアジーのこの性格の欠如は、間違いなく歴史の産物である。既にビスマルクが、ドイツ人に市民的勇気が欠如していることを嘆いていた。もちろんこうした不満は理不尽である。なぜならブルジョアジーの背骨をへし折ったのは他ならぬ彼自身なのだから。皇帝のドイツでは市民層はただ封建的支配層の影の下で発展したのであり、自身の徳を育むことはなかった。そのため彼らは余りにわずかな伝統と自己意識しか持ちえず、困難な状況には置かれたものの自由に動けるようにもなった戦後期に、一つの道徳的な勢力として自己主張することができなかった。……真正な自由主義を実際には決して実践することのなかったいわゆるリベラルなブルジョアジーは、外部から解散を強いられる前に自分を放棄したのである。」(E229)

労働人口のほぼ5割を占める労働者層には、ナチスは浸透することに最も成功しなかった。「組織されたプロレタリアートの原初的な自己維持衝動」のこの強さは、彼らの政治的指導層の無能さを思うといっそう驚きである。社会民主党はとめどないアパシー状態に陥って、一切の革命的行動を尻込みしていたから、ヒトラーはこの党に「無慈悲な慈悲の一撃(とどめの一撃) ein ungnädiger Gnädenstoß」を与えたに過ぎない。共産党は革命的ラディカルズムを行使することはできたが、モスクワとの結びつき、社会民主主義に対する憎悪、理論的硬直性が災いして、社会的現実を全く捉えることができなかった。

左派の指導者にとって特に致命的であったのが、ホワイトカラー、手工業者、小経営者、官吏、自由業など、中間層としての意識を持つ人々の状況を理解しなかったことである。職業人口の4割ほどを占めるこの中間層は、既に指摘したように戦後は経済的にプロレタリアートの水準にまで落ち込んだうえ、「イデオロギー的に宿無し」の状態に置き去りにされたから、資本主義そしてその源であるラティオに対して怨嗟の念を深めていた。他方で中間層は大戦前まで「文化的生を真に守り発展させてきた階層」、「ドイツの精神性の担い手」であり、「価値に満ちた実体の培養基 der Nährboden wertvoller Substanzen」として、政治的に大きな影響力のある運動を展開することができた。中間層は没落したが死んだのではなく、「最高に生き生きとした力で自らに課せられた重圧に立ち向かおうとしていた」(E224)のである。しかし社会主義政党は、中間層に内包されていたこの革命的エネルギーを看過してしまった。「中間層は使い古された概念装置で片付けられた。……全く自分を恃みにせざるをえなかったから、彼らは己の道を歩んだ。」(E226)プロレタリア化したブルジョア層は、ユンガーやタート派などを通じて新しいナショナリズムを孵化させた。ナチスも基本的にそれに属する運動である。「ナショナリズムがナチスの中心的触媒となった。……乾いた綿のように中間諸階層は、ナショナリスティックな熱狂を吸い込んでいった。」(E232)当然ナチの綱領は、中間層を構成する諸集団の相互に矛盾しないとは言えない様々な要求にも、抜け目なく応えている。即ち、手工業者や商店主には私有財産の保護と大規模店の規制を、サラリーマンには国際的投機の抑制と老齢年金を、官吏には国家が強力であった時代に有していた栄光を。

5 『カリガリ』の課題

繰り返して言う『カリガリ』の主たる目的は、以上のような共和国政治史の理解やナチス支持層分析が浮き上がらせているドイツの問題的な側面の、さらに踏み込んだ解明である。ドイツではブルジョアジーが社会の全面的近代化に挫折し、第二帝政期にはビスマルクの差配によって軍人でもある貴族や官僚と支配権を分け合っていたが、今まで見てきたとおりこうした跛行的な社会構造は敗戦と革命の後も持ち越され、民主主義定着の障害となった。ワイマールでは多くの国民、特に労働者と新旧中間層が、自由主義経済や人間関係の抽象化など近代化(＝ラティオの支配)の帰結にだけではなく、残存した前近代的な支配勢力の動きにも苦しめられた。しかし様々な外的な条件に制約された面はあれ、ドイツの国民は現在の苦境から近代化の反転に到るまでの徹底によって脱け出ようとはせず、かと言って単なる復古も求めずに、共和国を強力な指導者の統治に取って替えるという解決を選択したのだった。

確かにヒトラーは議会で過半数を獲得してはいなかったし、ナチスへのイデオロギー的反対勢力は十分に大きかった。にもかかわらずドイツ人は全体として、「単にプロパガンダや恐怖の結果ではないであろう容易さで、全体主義的支配に順応していった」(A204)。「それは当惑させる光景だった。一方ではドイツ人はヒトラーに統治権を与えることをためらったが、他方では彼を受け入れたがっていた。……ドイツ人は政治的次元ではヒトラーに反対していたので、ナチの信条に対する彼らの奇妙な受容態勢は、いかなるイデオロギー的疑念よりも強力な心理的性向によって創られたに違いない。」(A204)けれども、ヒトラーに進んで従属した人々、とりわけ中間層は単に権力に魅入られていたのではなかった。彼らはまた近代への敵意にも駆り立てられており、ナチ運動はこうした志向を持つ中間層という母胎から養分を得て、本来は違う政治的ベクトルを有する他の諸階層を巻き込みながら成長していったのだった。「中間層から出現したナチスは、今日に到るまでそれに支えられている。」(E224)クラカウアーは、自身の利益を長期的な視野では損ねてまでも、退行的な方向での近代超克を目指したドイツ国民のこの精神の展開を、『カリガリ』で追っていくのである。

こうしたクラカウアーの狙いを誤解しないために、反対に『カリガリ』で彼は何を主張してい「ない」かを、改めて確認しておきたい。『カリガリ』は、従来のナチズム論では暗闇の中に放置されてきた、ヒトラーの許に走ったドイツ人の心理の機制に光を当てる試みである。しかしナチズムの勝利にとって心理的素因だけが決定的であったと、クラカウアーは考えているのではない。ドイツの近代化の問題性を捉えた視野の中で、特にある社会階層の精神傾向が共和国を崩壊させた一つの要素として抽出され、批判的に考究されるのである。第二に、『カリガリ』はしばしば「マルクス主義的」と評されるけれども、ナチズムは資本主義発展の最終段階の産物と見なされているわけではなく、心理(およびそれを可視化するものとしての映画)も「下部構造」の単なる関数として考えられてはいない。むしろクラカウアーはドイツ精神の不変の本質などを設定してはおらず、ある社会の集団心理は経済的状况また自然環境などの外的条件に依存することを認めているが、しかしそれはしばしば固有の発展の論理を獲得して、「歴史の展開の本質的駆動力」となるだろう。『カリガリ』では精神はそれ自体の論理を蔵する独立した因子として、内在的に解明されるのである。最後に、クラカウアーはヒトラーの台頭を、人間のアトム化といった「近代化」自身の帰結として捉えているのではない。それはむしろ、ドイツの近代化の(例えば英・仏と比較しての)特異性と関係付けられていく。

これまで、『カリガリ』の目的およびその背景となっている共和国観について述べてきた。だが『カ

リガリ』でクラカウアーが提示するワイマール映画史を辿るためには、次に彼の Straße (街路, ストリート) 概念を見ておかなければならない。ワイマール時代のクラカウアーの街路を対象とした思考を踏まえておかななくては、『カリガリ』の映画分析を十分に理解することは決してできないのである。そして彼の街路論を辿っていく過程で、クラカウアーが先に触れた諸階層以外の特筆すべきナチス支持集団として挙げている「無職の若者たち」にも、焦点が当てられることになる。

Ⅲ 『カリガリからヒトラーへ』を読むために② クラカウアーの街路論

1 室内と街路

共和国後期のクラカウアーの批判的思考は、いわばその「消尽点」としてあるユートピア状況に、つまり人間が自然の力に盲目的に屈服するのでもラティオの力によって逆にそれを一方的に支配するのでもなく、理性 Vernunft の働きを通じて人間と自然とが宥和に達した状態に、定位していた。この理想が実現されるための不可欠の条件と見なされたのが、近代の、特に資本主義的経済体制の克服である。クラカウアーによれば近代は、ラティオが自律し基本原理となった時代である。ラティオの支配は、超越論的主観が世界を一方的に組み立て直すという観念論的思考のうちに、また「個人」を労働者/消費者として貨幣と生産物との循環の中に組み入れる「商品」経済の体制のうちに顕現している。それゆえ近代においては、人間は長い自然(自生的共同体)の呪縛から解き放たれながら、同時に内容を欠いた閉塞的体系に囚われやがて再び自然に侵食されていくのである。観念論に対しては、クラカウアーは批判的視点をワイマール時代を通じて一貫して保持し続けた。しかし初期の彼は実存に「意味」の回復を期待するという、いわば主体の転換を重視する立場を取っていたのに対し、20年代中期以降クラカウアーは、肥大したラティオを掘り崩すにはその支配の「物質的」具現である社会編成を瓦解させることが必要条件だと考え始める。彼は経済体制のラディカルな変革を説くようになり、個人意識を弱めた、言い換えれば自我の内在性を脱し他に開かれた人々が作り出すアモルフな共同体を、社会の転換の帰趨する先として展望していく。変貌した社会の中で自然が支配していた時代の古き意味からも、ブルジョアジー時代の「人格性」や「経済法則」などからも解放され、一切の神話的閉鎖系を拒否しつつ本質的に弱々しい理性のメッセージを受信していくとき、人々は自然と諧和し求めていた「幸福」に達するであろう。

クラカウアーはこうしたユートピアを理論的に構想はせず、彼の思考のスタイルに相応しく、同時代の何気ない経験のスケッチのそこそこに先取りされたその断片を織り込んでいた。個人主義的な近代世界が、相互に扉を閉ざしたブルジョアジーの私的個室によって象徴されるとすれば、そこでユートピアを幻視しうる場は、相互に匿名的な人間が流入し一時的に関わり合う開かれた空間であるだろう。それゆえクラカウアーは、例えば駅の遊歩の歓びを描く。「駅のホールを横切って行ったり来たりうるつくことは、余りに住み慣れた街から逃げ出したいと望むときの私には、抵抗することのできない衝動である。駅から旅立ってしまったら、私の遊歩衝動 Flaneurlust は満たされないであろう。それはただ、駅それ自体の中でのみ鎮められるのである。」(F155) 見知らぬ地域ではなく、駅こそが別の世界を垣間見せてくれる。「駅に対する私の愛は変わることがなかった。駅は港と同じく、安住の地ではない場である。ここに住み着くことはできない。出会いがあったとしても、すぐに別れが来る。し

かし他のあらゆる場所で縛られている人々は、駅では荷物を抱えてはいるもののいかなる拘束からも自由である。全てのことが可能である。古いものは消え去り、新しいものは未規定である。短期間、人々は再びヴァガボンドになる。……それゆえ駅での滞留以上の楽しみなどはない。日常の荒地の只中で、駅は即興というオアシスを提供しているのである。」(G175)そして自伝的小説『ギンスター』での駅舎の描写では、近代世界で一般の人々が集う「公的な」空間への彼の愛着は、彼の幸福の原体験も基礎となっていることが示されている。「まだ幼い頃からギンスターは、鉄道の駅にいるのが好きだった。ギンスターは今、駅に魅了された特別の出来事のことを思い出していた。それは彼がまだ編み物に熱中していたときのことだった。……ある日曜日の昼食後に、プラットホームのベンチに腰掛け、旅行者やトランクや休日を楽しむ者たちの間にはさまれて、彼は夕暮れまで編み物をし続けた。……絶えず新たに生まれては纏れ合う雑踏の中にまぎれていることは、幸せだった。この幸福の感情に包まれて、彼は駅舎のドーム型のガラス屋根の上に壮麗な輝きの網を投げかけるような心地になった。光の網は汽車の吐き出す煙と混ざって、暗闇の中に溶けていった。遂にはドーム型のガラス全体が一つのきらめきとなり、中でステアリン蠟燭が燃えている色鮮やかな紙提灯のように、輝きが人間を透過していった。光に酔って、彼自身が赤々と燃え盛った。小さな布切れが忘れられたまま、彼の手の編み棒の間でぶら下がっていた。」(H150 - 151)

クラカウアーはこうした駅舎を含めた広義の *Straße* を、近代社会に対置される世界の比喩的な像としてしばしば用いている。もちろん彼のテキストに最も頻繁に現れているのは狭義の *Straße* (街路, ストリート) であり、クラカウアーによる共感に満ちたパリの下町の通りの描写は、既に別稿で紹介しておいたとおりである。³⁾ 1933年には、彼のエッセイを「街路本 *Straßenbuch*」としてまとめる企画も出版社から提案された。政治状況の悪化のため一度流れたこの計画はおよそ30年後の1964年に実現され、クラカウアーは自ら編集したその本に、「ベルリンの街路、それからどこか別の場所 *Straßen in Berlin und anderswo*」という名前をつけたのだった。

2 パリとベルリン

しかし20年代末以降より、ドイツの街路に触れるクラカウアーのテキストには不安と懐疑の影が濃くなっていく。クラカウアーのこうした懸念は、等しく「思い出 *Erinnerung*」を主題としながらそれぞれパリとベルリンの街路を扱った二つのテキスト、1930年の「パリの街路の思い出 *Erinnerung an eine Pariser Straße*」と1932年の「思い出なき街路 *Straße ohne Erinnerung*」との比較から浮かび上がってくる。偏った近代化のせいでドイツの街路には、社会の進歩的な方向への転換に必要な「覚醒」の契機が決定的に欠如しているのでないか、と彼は危惧するのである。

「パリの街路の思い出」は、表題通りパリでのある経験の記憶を綴ったテキストである。一月ほど前からパリに滞在している「私」は、街路に惹きつけられ、憑かれたように毎日何時間も通りを放浪している。遊歩へのこの衝動は余りに強く、一晚劇場で過ごしただけでも自責の念に苛まれるほどである。「蓄積する疲労が私の周りに広げていく霧の背後から、なおいっそう魅惑的に街路は私を誘うのだった。」(17)しかし「私」は決して目的を持たない散策者ではなかった。「私」は何かを忘れてしまったことを知っており、思い出せない言葉に行き当たろうと記憶を手繰る者のように、それを求めて街路を彷徨していたのである。いわば探偵となった「私」は、忘却してしまったものに逢着する場所に

辿りつくため、薄明から日没まで様々な通りを巡り、どんな細い横道にも足を踏み入れた。あらゆる街路を歩きつくす果てに、「私」は単に空間の中だけではなく、その限界を超えて時間の次元をも動いているようにさえ感じた。こうした探索の過程であるプロレタリア地区の街路を通り抜けようとしたとき、突然「私」は見えない網に囚われ、体の自由を奪われた。見回すと、通りの両側にはホテルの紋章のついた廃屋が並び、その一軒の二階の窓から若い男たちとしどけない姿の女たちが、暴力の気配を漂わせながら無言で「私」を見つめていた。思うように動けなくなったのは彼らの視線のせいだと「私」は考え、自分を奮い立たせ歩き始めるが、その途端にある「生きたイメージ ein lebendes Bild」に打たれて、また足が止まってしまうのだった。それは一軒のホテルの開け放たれた窓から見えた、部屋の真真中で頭を抱えて椅子の上に座り込む、若い男の姿である。街路は部屋の床と同じ平面であり、「私」は「枠の外れた」窓の前にいたのに、髪が乱れた若い男はこちらに気づく様子にはなかった。「彼にとっては全く何も存在しない。彼は全く一人で空虚の中を小さい椅子に腰掛けている。彼は不安である。彼がこんなにも意気消沈しているのは、不安のせいである。……」(111) 知らないうちに「私」は、その街路から逃げ出していた。男のイメージを振り払おうと馴染みの雑踏に浸っても、それはいつまでも付き纏い、1時間ほどさまよった挙句結局「私」は元の場所に舞い戻った。学校帰りの子どもたちの一団が無邪気にあの街路に入っていくことに励まされ、「私」は再びそこに足を踏み入れてみる。しかしそこで「私」はやはり、見下ろす沈黙した人々の眼と頭を抱えた男のヴィジョンに捕えられ、通りの途中で立ちすくんでしまう。「私」は廃墟の壁がゆっくりと迫ってくるように感じ、遠くから聞こえる子どもたちの笑い声に縋りついて、ようやくその街路から脱け出たのだった……。

街路で忘却した何かを探すこの謎めいた物語で、「私」は衝撃的に出現する「思い悩む男のイメージ」において、追い求めていたものに遭遇しているのであろう。それではこの出来事で何が生じたのか。クラカウアーの先駆的な研究者の一人ミュルダーは、「私」が忘却していたものとは実は抑圧し意識から排除していたものであり、そうであるがゆえに「私」はそれとの出会いに慄いたのだと説いている。⁴⁾ この解釈は説得的であると思う。テキストは「私」を若い男とを同一平面上に枠のない窓を挟んで差し向かいに据え、両者が鏡像関係にあることを、つまり「私」がありのままの自分の姿に逢着したことを示唆している。そして、「私」がそこから逃避しようとした自己、苦悩する若い男は、「廃墟」や「荒んだ若者たち」と同一の場に配されていることから、「メランコリー(憂愁)」のイメージとして読み解くことができるだろう。ベンヤミンにとっても重要な形象の一つであるメランコリカー(憂愁に沈んだ人)は、一切を滅びゆくもの、儂いものとしか見ることのできない現実性を失った人間である。確かにクラカウアーの思考にはその最初期より、現実性感覚喪失の刻印が押されていた。だが他方で、ラティオに導かれる近代世界は全てを商品化し短い誕生と死滅のサイクルの中に取り込んでいるから、メランコリカーへの融合は、近代の表面的安定と壮麗さを貫いてその本質相(移ろいやすさ Vergänglichkeit)を捉える視野を開くことでもある。それゆえメランコリカーとの出会いは、世界の本質的空虚さの原体験の想起として彼をたじろがせつつ、同時に近代社会の夢想状態から彼を揺さぶり醒ますのであり、いったん目覚めた彼はもはや眠りにつくことはできない。しかし覚醒した人間にとって全てが空虚に流れる近代は、それ自身に移ろいゆくもの、従って乗り越えうるものとしても現れるのである。

重要なことは、パリの街路でこうした経験をしたのは決して偶然ではない、と匂わされている点である。「私」はいわば不可抗的な魅力で街路に引き寄せられ、探求へと促され、覚醒へと到ったのだった。「パリの街路の全てはそれ自身の匂いと、それ自身の歴史を持っている。この歴史は過ぎ去ってし

まったのではなく、あたかも今日の出来事であるかのようになお生き続けている。……おそらくそれは、反対にパリでは現在が過去のほのかな輝きを身に帯びているせいであろう。」(I13) 過去と現在とを混交させているパリの街路では、人は近代の歴史的相対性を意識せざるをえない。クラカウアーがフランスに関して論じた最初の作品である 1927 年の「パリの観察」でも、パリが歴史つまり過去の記憶を保存していることが指摘されていた。そしてそこでは加えて、それゆえにパリは自然との宥和の幻影を手放すことがなかったと述べられている。「18 世紀の啓蒙も自然に担われており、最も繊細な精神性も自然の地盤から切り離されていない。だがこの自然はただ……農夫しか生み出さない純然たる内陸ではなく、海によって囲まれており、その岸からは根を持たない人々が入り出している。」(J27) このような歴史的連続性のうちにあるがゆえに、街路は人をかつて抱かれた夢の残骸の将来における救済へと誘うのである。「パリの街路の思い出」は、次のような文章で締めくくられている。「現在の街路を散策していても、それは既に思い出のようにおぼろげである。だが街路が喚起する思い出の中では、現実性〔現実性を取り戻した世界〕がそれに関する何階建ての夢と混交し、塵が星座と邂逅している。」(I13)

それに対して「思い出なき街路」では、こうした思い出を立ち昇らせることのないベルリンの街路が描かれる。消費社会化の面においてだけは先進的なベルリンでは、新しいものはより新しいものによって完全に駆逐されている。次々と新しい店や建物が出現しては、一切痕跡を残すことなく消え去ってしまうのである。「今日のクーアフルステンダム〔当時のドイツの代表的なショッピングストリート〕は、何も持続することのできない空虚な時間の具象化である。」(K18) ベルリンの街路は無内容な商品循環の場であり、パリの街路のような覚醒の契機は極めて希薄であるため、「偶然以外にはいかなる力も失われたものを忘却から救い出すことはできない」(K21)。「多くの家屋からは、昨日への橋の一種であった装飾物が取り去られている。それを奪い取られたファサードは、今や抛り所なく時間の中にたたずみ、その背後で展開されている無歴史的な変転の感覚的イメージとなっている。ただ正面玄関の奥からわずかに姿を見せている大理石の階段室だけが、思い出を保存している。大戦前の支配階層の世界の思い出を。」(K21 - 22)

クラカウアーはベルリンの街路のこうした性格を、1930 年 7 月に発表した、ベルリン西郊外の通りの「不気味さ」を主題とする「街路の悲鳴」でも記録している。1920 年代に副都心として発展したベルリン西部は、クーアフルステンダムを擁する世界でも最先端の消費文化街であり、緑の樹木の並んだその大通りは陰気でもなく寂れてもおらず、広々として清潔で明るかった。にもかかわらずクラカウアーは、この馴染みの道でしばしば言い知れぬ不安を覚えるのである。それは起こりうる暴動に対する不安ではなかった。「西部の街路は、対象のない恐怖を吹き込む。……ここでは誰もが互いに何も期待せず、内容もなく空虚に ohne Inhalt und leer ぼんやりと道を行って行く。この空虚が、街路を数秒の間これほど不気味にするのだろうか?」(L27) この地域で、クラカウアーはこの夏三度も悲鳴を耳にしていた。一回目は酔っ払いの怒号、二回目は恋人と喧嘩をした女性の罵声であることがわかったが、「三回目は間違いなく人が殺されたことを告げていた。それを聞くや否や私は走って角を曲がっていた。私以外にも数人が走っているのを見て、緊張は倍加した。私たちが車道を渡り、悲鳴が発せられた街路へと折れると、散歩中の人たちが驚いたように私たちを見つめた。彼らの歩みはのんびりしていた。私たちの後ろで一軒の家が鍵を降ろした。」(L28) クラカウアーはこの不可解な出来事を振り返り、悲鳴を上げたのは人間ではなく街路自身だったのではないかとつぶやく。「もはや空虚に耐えられなくなると、街路はそれを呼び出すのだ。」(L28)

全体が不気味な通りでどこかはっきりしないところから聞こえてくる悲鳴は、現在の危機に気づかせながら、同時にどこにも脱出口を見出せないほど街路が閉ざされていることを仄めかす。「転換」の積極的可能性を欠いたドイツの状況を特異な仕方でも表現しているこのエッセイでは、「室内」と対比されていたはずの街路は、むしろ徹底された近代的消費社会の具現となっている。そして、国内の情勢がいつそう緊迫化すると、ラティオに統べられた街路は抑えていたはずの原初的な自然に侵食されていくだろう。街路を呑み込むこの自然を体現するのが、クラカウアーがナチスを構成する主要な社会集団の一つと見なす、大通りにたむろする「無職の若者たち Jugend」であった。

3 ストリートの反逆する若者たち

恐慌以降ドイツでは、失業しないしはそもそも就職できなかった若者の数が急増し、彼らは家にもどこにも居場所を見出すことができずストリートへと吹き寄せられていった。街路を住まいとするのは労働者階級の若者だけではなく、中間層出身の青年の多くも「生活のために職から職へと渡り歩いた末、結局は街路へと行き着いていた」(M245)。クラカウアーは1932年から亡命時代の初期まで、こうした若者たち取材した「ルポルタージュ」作品、また彼らの政治的見解や姿勢を表明した著作をその論稿でしばしば取り上げ、ドイツの青年が置かれた状況や彼らの願望を探っていく。もっとも既に以前より彼は、ドイツ精神における「若さ」の異例な枢要さに注目してはいた。ドイツでは若者は大人への発展途上の存在としては捉えられていない。そこではむしろ「成熟」ではなく「若さ」こそが人間の完成度を測る基準であり、青年たちが一人前の「成人」に見られようとする他国とは反対に大人が若者風の振る舞いを誇示している。クラカウアーによれば、この若さの過剰評価はドイツの精神を規定してきた観念論の帰結である。観念論とは簡単に言えば、理想を彼方に据え、いかなるものであれ現実を究極的なものと見なすことを拒否する世界観であるが、それが世界の实情から遊離して遙かな目的を求める青年的な人間像を支配的にしたのであろう。いずれにせよ、ドイツには若者の自己主張としての政治運動が起こり(タート派も基本的に若者の政治運動であった)、軽視しえない社会勢力へと成長することのできる土壌が存在していたのである。⁵⁾ それゆえにこそいつそうクラカウアーは「職のない若者たち」の動向を注視したのであり、以下でそれを主題とした幾つかのエッセイに基き、「青年たちとナチス」に関する彼の考えをまとめてみよう。

街路の「真空 Das Vacuum」の中で青年たちは、自分たちの未来にいかなる展望も拓いてくれない「体制」に対して憎悪を深め、急進化していかざるをえない。「なお一度も労働過程に組み込まれたことのない何百万人もの失業した様々な年齢の若者たちは、黙示録的約束と今手の中にはないパンに引き寄せられざるをえない社会層である。全ての関係を完全に変革する見込みもなく脇に押しつけられ、そのうえ飢えていなくてはならないことは、完全な地獄であろう。」(E231) しかも彼らの現状に対する不満は、ドイツ精神の宿痾というべき悲劇的な現実との疎遠さ Wirklichkeitsfremdheit のせいで、「対象との関係を完全に欠いた感情的なラディカリズム」へと振れがちであった。そのため職のない青年たちは共産党とナチスとの間を揺れ動き、どちらがより多く彼らを自陣に引き入れるかは、「演説者の巧みさにかかっていた」。しばしば触れてきたその行動の不適切さのため、敗北したのは共産党だった。「おそらく中間層のプロレタリア化した青年たちは、もっと柔軟に彼らの精神的伝承財産が尊重ささえられていれば、マルクス主義を誤解することはより少なかっただろう。」(M249) また共産党は、スト

リート of 若者たちを捉えているナショナリズムも真剣に受け止めようとはせず、不注意にもそれを単なるイデオロギーとして敵視ないし蔑視した。だが「しばしば神話的に誇張されている」、燃え盛るナショナリズムは、「これほど疑わしくなってしまった己自身の存在 Existenz をナツィオン Nation のそれによって確かめ高めたいという、希望を奪われた若者たちの願いから発現したのだ。ナショナルなもの Das Nationale ははっきり輪郭づけられた客観的な目的であるというより、彼らの内面から湧き出た視界を切り開いてくれるファンタスマゴリーなのである。」(M249)

従って当然のことながら、ドイツの無職の青年は共産党ではなくナチスにより惹きつけられていった。ヒトラーは彼らに、企業から得た豊富な資金を利用して食料と制服を供給しただけではない。ナショナリズムを主要な要素とするナチスは、「彼ら全てに自分たちは必要な存在だという感情も与えた。運動の中に組み入れられて、彼らは社会のパーリアから第三帝国の前衛となったのである。」(E231) ナチスはストリート of 青年たちを魅了する性格を他にも備えていた。クラカウアーは 1932 年の「職のない大都市の若者」で、「空虚な空間へと排斥された青年はどのような結合へと向かうのか」という問いに対し、アルバート・ラムのルポルタージュ『欺かれた若者たち』からの引用で答えているが、その文章は街路に集まった青年たちがナチスに近い同士の団結心を育んできたことを示している。「この世界の不気味で神秘的な力が、彼らの無条件的な連帯である。それが彼らの拠り所であり、希望である。……彼らの各々はたいていまず自分の利益を考える。だが彼らの世界の限界に逢着するとき、異質な巨大な力の世界から来た誰かあるいは何かに遭遇するとき、彼らは結束する。襲撃した相手の正不正は問わない。そのことが彼らの盟約を祝祭的に高揚させ、……彼らの反抗とデモンストレーションに暗い力を与える。」(N125) 他方で、総統への無条件的な帰依は若者たちの自由の放棄を意味してはならず、むしろそれは彼らが「自由」を心ゆくまで享受することを可能にする。なぜならドイツの「観念論的」な青年たちは、総統への服従によって「観念論が耐えることのできない現実との直接対決」を総統に任せられるからである。彼らは現実に関わる問題における隷従と引き換えに、「観念論が約束する想像力と感情の自由」を手に入れるのである。

このように先鋭化したストリート of 若者たちがナチスへと合流していくと、クラカウアーのテキストにおいて街路は、宥和の光が差している空間の面影を完全に消して、若きナチスが反共和国の示威行進をする舞台として現れてくることになる。クラカウアーは 1933 年の「ドイツの若者について」の冒頭で、魅力的で頭のよい、かつナチスでは全くないドイツのある青年が漏らした次のような感想を紹介している。「『例えば夜の行進をする SA がどれほどの魅力を若い世代に対して持っているか、あなたにはほとんどご理解いただけないでしょう。率直に言えば、私自身も運動の魔力に抵抗するのは困難なのです。』この若者は狂信的なヒトラー信奉者の過激さを是認することはないだろう。……しかしそれと同じ位確実に彼はナチスの呪縛に囚われており、ナチスに殆ど形而上学的とも名づけるべき希望を託している。」(M243) クラカウアーのドイツの街路への希望は幻滅に終わり、今やそれはドイツの挫折を典型的に示す場にすらなった。『カリガリ』で街路はワイマール時代のドイツ映画に頻出する注目すべき形象の一つとして取り上げられるが、後に見るとおりそこではそれは、もっぱらドイツの未成熟や自然への退行の徴として解釈されるのである。⁶⁾

* 括弧内のローマ字と数字は、引用した文献とページ数とを示している。各ローマ字が表している文献は以下の通りである。クラカウアーの作品は著者名を省略している。なお *From Caligari to Hitler* に関しては、平井正訳、『カリガリからヒトラーまで』、せりか書房、1977 年（増補版）を、ロー

ゼンベルクの *Geschichte der Weimarer Republik* に関しては、吉田輝夫訳、『ヴァイマル共和国史』、東邦出版、1976年をそれぞれ参照させて頂いた。

- A ; *From Caligari to Hitler A Psychological History of the German Film*, Princeton, Revised and Expanded Edition, 2004.
- B ; Artur Rosenberg, *Geschichte der Weimarer Republik*, Frankfurt am Main, 1973
- C ; *Marbacher Magazin 47/1988 Siegfried Kracauer 1889 - 1966*, Marbach, 1988.
- D ; *Siegfried Kracauer - Erwin Panofsky Briefwechsel*, Berlin, 1996.
- E ; “ Die deutschen Bevölkerungsschichten und der Nationalsozialismus ” ,in *Schriften 5・3*, Suhrkamp, 1990.
- F ; “ Einer, der nichts zu tun hat ” ,in *Schriften 5・2*, Suhrkamp, 1990.
- G ; “ Die Eisenbahn ” ,in *Schriften 5・2*.
- H ; *Ginster*, in *Schriften 7*, Suhrkamp, 2004.
- I ; “ Erinnerung an eine Pariser Straße ” ,in *Straßen Berlin und anderswo*, Berlin, 1987.
- J ; “ Pariser Beobachtungen ” ,in *Schriften 5・2*.
- K ; “ Straße ohne Erinnerung ” ,in *Straßen Berlin und anderswo*.
- L ; “ Schreie auf der Straße ” ,in *Straßen Berlin und anderswo*.
- M ; “ Über die deutsche Jugend ” ,in *Schriften 5・3*.
- N ; “ Großstadtjugend ohne Arbeit ” ,in *Schriften 5・3*.
- O ; “ NOTES on the planned HISTORY OF THE GERMAN FILM ” ,in *Siegfried Kracauer - Erwin Panofsky Briefwechsel*.

注

- 1) クラカウアーのフランス、アメリカへの亡命の経緯に関しては以下の文献を参照した。
Helmut Stalder, *Siegfried Kracauer Das journalistische Werk in der >Frankfurter Zeitung<1921 - 1933*, Würzburg, 2003. *Marbacher Magazin 47/1988 Siegfried Kracauer 1889 - 1966*. Momme Brodersen, *Siegfried Kracauer*, Reinbek bei Hamburg, 2001.
- 2) ワイマル史およびナチスに関しては、以下の文献も参照した。A・ローゼンベルク、足利末男訳、『ヴァイマル共和国成立史』、みすず書房、1969年。山口定、『ヒトラーの抬頭』、朝日新聞社、1991年。同、『ナチ・エリート』、中央公論社、1976年。村瀬興雄、『ナチズム』、中央公論社、1968年。G・W・F・ハルガルテン、富永幸生訳、『ヒトラー・国防軍・産業界』、未来者、1969年。W・フィッシャー、加藤栄一訳、『ヴァイマルからナチズムへ』、みすず書房、1982年。
- 3) 拙稿、「ジークフリート・クラカウアーの奇妙な唯物論 - 神学からマルクス主義へ - 」、『京都教育大学紀要』、第106号、2005年、94 - 95頁を参照せよ。
- 4) Vgl. Inka Mülder, *Siegfried Kracauer Grenzgänge zwischen Theorie und Literatur* , Stuttgart, 1985, S.77 - 85.
- 5) Vgl. “ Europäische Jugend ” ,in *Schriften 5・3*. S.288 - 291.
- 6) これから本論および注で取り上げる映画は、原則的に公開時の邦題だけを記載する。(日本未公開

の場合は邦訳を記載する。)以下にそれらの原題をあらかじめ記しておく。「プラークの大学生(1913年版) Der Student von Prague」,「ホムンクレス Homunculus」,「ゴーレム Der Golem (1913年版)」,「カリガリ博士のキャビネット Das Cabinet des Dr.Caligari」,「ノスフェラトゥ Nosferatu」,「ドクトル・マブゼ Dr.Mabuse,der Spieler」,「裏町の怪老窟 Das Wachsfurkabinet」,「死滅の谷 Der müde Tod」,「ニーベルンゲン Die Niebelungen」,「意志の勝利 Triumph des Willens」,「最後の人 Der Letzte Mann」,「聖山 Der heilige Berg」,「戦く影 Schatten」,「ゴーレム(1920年版) Der Golem」,「ライン悲愴曲 Fridericus Rex」,「蠱惑の街 Die Straße」,「もう一人の男 Der Andere」,「ヴァリエテ Variété」,「タルチェフ Tartüff」,「ファウスト Faust」,「スピオーネ Spione」,「月世界の女 Die Frau im Mond」,「プラークの大学生(1926年版) Der Student von Prague」,「死の銀嶺 Die weiße Hölle von Piz Palü」,「喜びなき街 Die freudlose Gasse」,「街の悲劇 Dirnentragödie」,「アスファルト Asphalt」,「メトロポリス Metropolis」,「ベルリン 大都会交響曲 Berlin,die Symphonie einer Großstadt」,「カメラをもつ男 Man with Movie Camera」,「懐かしのパリ Die Liebe der Jenne Ney」,「パンドラの箱 Die Büchse der Pandora」,「クラウス伯母さんの幸福への旅 Mutter Krausens Fahrt ins Glück」,「嘆きの天使 Der blaue Engel」,「M M」,「制服の処女 Mädchen in Uniform」,「恋愛三昧 Lieberei」,「怪人マブゼ博士 Das Testament des Dr.Mabuse」,「西部戦線 1918 Westfront 1918」,「三文オペラ Die Dreigroschenoper」,「炭鉱 Kameradschaft」,「クーレ・ワンペ Kuhle Wampe」,「カラマゾフの兄弟 Der Mörder Dimitri Karamasoff」,「青の光 Das blaue Licht」,「アルプスの血煙 Der Rebell」,「ロイテンの聖歌 Der Choral von Leuthen」,「フリードリッヒ Fridericus Der alte Fritz」,このうち,残念ながら「ホムンクレス」,「ゴーレム(1913年版)」,「ライン悲愴曲」,「街の悲劇」,「カラマゾフの兄弟」,「ロイテンの聖歌」を見る機会を得られなかったことをお断りしておきたい。なお,『カリガリ』で取り上げられながら本文では言及しなかった映画で,以下の作品は見ることができた。「Anders als die Andern」(1919),「Michael」(1924),「Geschlecht in Fesseln」(1928),「日曜日の人びと Menschen am Sonntag」(1929),「淪落女の日記 Tagebuch einer Verlorenen」(1929),「モンブランの嵐 Stürme über Montblanc」(1930),「ガソリンボーイ三人組 Drei von der Tankstelle」(1930),「会議は踊る Der Kongreß tanzt」(1931),「火の山 Berge in Flammen」(1931)。